

ウェルザー=メストがヨーゼフの率いたシュトラウス楽団を復活させる

若宮 由美 (op.257)

ウェルザー=メストは3度目で、今回は19世紀中ごろのヨーゼフが中心となったシュトラウス楽団が復活。ヨハン2世が楽団を離れ、ヨーゼフは商業ダンス音楽を支えるために奮闘しますが、兄とは少し音楽的な質も異なり、ワーグナーやリストを指向する姿勢もありました。ウェルザー=メストは劇作品にも高い評価があり、彼の描くヨーゼフの姿に興奮が収まりません。ウィーン少年合唱団と姉妹合唱団「ウィーン少女合唱団」も登場。新曲ぞろいの新年です。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈誰と一緒に踊るの?〉 op.251

Eduard Strauss: *Wer tanzt mit?, Polka schnell, op.251*

1870年にウィーンのカール教会の向かい側に新しい楽友協会が建ちます。「ハムサム・エディー」と呼ばれたエドゥアルトはまさにこの演奏会場(本日の会場)で、創設直後にコンサート・ツィクルスを企画。日曜の午後に芸術音楽と気軽な音楽を混ぜ合わせた内容は、いままでにない構想であり、堅苦しい場所として演奏会場に足を運ばなかった人びとを演奏会へと誘いました。同曲は1886年11月7日のこの演奏会で初演されました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈英雄の詩〉 op.87

Josef Strauss: *Heldengedichte, Walzer, op.87*

ウィーン王宮の英雄広場に2つの騎馬像があります。古い方がカール大公像。1809年にナポレオン軍を打ち負かした人物。新しい方がオイゲン公像。ここで重要なのは前者で、アスペルンの戦いの50年後に完成し、1860年5月22日に除幕式が挙行。皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が銅像の除幕を行う機会に、フォルクスガルテンでシュトラウス楽団は祝祭演奏会を開く予定でしたが、天候が悪く、この祝祭は5月25日に開催され、同曲も初演。

ヨハン・シュトラウス2世：《ジプシー男爵》のカドリーユ op.422

Johann Strauss (Sohn): *Zigeunerbaron-Quadrille, op.422*

オペレッタ《ジプシー男爵》は1885年10月24日にアン・デア・ウィーン劇場で初演。同曲は翌年1月28日にウィーン王宮の儀式の間にて初演し、3月2日にはゾフィーエンザールでの「コンコルディア舞踏会」にて演奏。出典について、パンタロンは〈徴兵の歌〉(第2幕 No.12a):ホモナイ公爵「こちらに君の手を出し」、アンサンブル(第1幕 No.5):バリнкаイ「唇はなまめかしく」、フィナーレ(第1幕 No.7):ジプシーの合唱「この歌は我々の精神を満たし、弾けさせ、輝かす」の伴奏部、エテはアントレ・クプレ(第1幕 No.2):バリнкаイ「ライオンはひれ伏し」の伴奏部、行進曲-クプレ(第3幕 No.16):「タホの海岸から」、プレはフィナーレ(第2幕 No.13):バリнкаイ「さあ、私は軽騎兵だ!」の伴奏部、その前の部分、三重唱(第2幕 No.9):ザッフィとツィプラ「彼は笑っているわ」、トレニスミラベラ・クプレ(第1幕 No.4):合唱「ああ、大砲が炸裂する」、ミラベラ・クプレ(第1幕 No.4):ミラベラ「周囲に大砲の轟音がーボン!」、パストゥレルはアンサンブル(第1幕 No.5):娘たちの合唱「私たちは古い習慣を」の伴奏部、ミラベル・クプレ(第1幕 No.4):ミラベル「わ

ずか24年しか経っていません」、続くミラベル・クプレ、フィナルは入場行進(第3幕 No.17): 合唱「フラワー、我々は遠く離れた国で戦って来た」、フィナーレ(第1幕 No.7):フィナーレで何度か奏されますが、歌詞はザッフィ「この地は、あなた幼少時代を過ごした」。

カール・ミヒャエル・ツィーラー：ワルツ〈心地よい夜に〉 op.488

Carl Michael Ziehrer: *In lauschiger Nacht, Walzer, op.488*

オペレッタ《放浪者》の第1幕のローラントによる「ほめたたえよ、心地よい夜」が大評判となり、独立した曲になりました。《放浪者》は1899年7月26日にウィーンのヴェネツィア夏季劇場で初演。物語はフリーダーブッシュ夫妻が宝石を手に入れようとする話です。同曲は司法官試補のローラントが夜の湖で泳ごうと水に入る場面。同曲には、ヨハン2世のワルツ〈螺旋〉 op.209 との類似が認められます。シュトラウスのワルツは1858年1月31日に王宮のレドゥーテンザールの技術家舞踏会で初演した作品。ツィーラーがこの曲を知っていたことは事実。しかし、彼はこの曲を借用した事実は認めませんでした。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈元気に行こう！〉 op.386

Johann Strauss (Sohn): *Frisch heran!, Polka schnell, op.386 Frisch heran*

1880年にヨハン2世は《女王のレースのハンカチーフ》を制作中でしたが、その合間に「コンコルディア協会」のために同曲を作曲し、2月2日にゾフィーエンザールでの舞踏会で快活なポルカを初演しました。エドゥアルトが題名付けに協力したといえます。

フランツ・フォン・スッペ：喜劇的オペレッタ《イザベッラ》序曲

Ziehrer: *Ouverture zur komischen Operette Isabella*

1幕物のオペレッタで、1869年11月5日にカール劇場で初演。台本作家は警察官であり、長年ウィーン男声合唱協会の専属詩人であったヨーゼフ・ヴァイルで、ヨハン2世の〈美しく青きドナウ〉の最初の歌詞を書いた人物です。物語はスペイン風のもので、序曲では抒情的なファゴット・ソロが突然として短く表われ、華々しい行進曲へ移行します。その後はウィンナ・ワルツ、再びスペイン風の色調に戻ります。

ヨーゼフ・シュトラウス：演奏会用ワルツ〈愛の真珠〉 op.39

Josef Strauss: *Perlen der Liebe, Konzert-Walzer, op.39*

1857年6月8日にヨーゼフはレオポルトシュタットの聖ヨハン教区教会でカロリーネと結婚。その前夜に〈愛の真珠〉の楽譜をプレゼントしました。ヨーゼフの情熱にあふれた曲は、通常のシュトラウス家の商業ワルツではなく、ヴァーグナーやリストのような交響曲を意識したワルツだということです。ですから、ダンス・ホールで踊りながら聴くのではなく、「演奏会用ワルツ」として座って聴くように仕向けられています。初演日は当初6月30日でしたが、雨のせいで同じくフォルクスガルテンでの7月6日になりました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈アンゲリカ・ポルカ〉 op.123

Josef Strauss: *Angelica-Polka, Polka française, op.123*

1862年6月1日にノイエ・ヴェルトで初演。清潔感のある曲は大勢の女性の名前として有効なアンゲリカのために作られました。7月にパヴロフスクのヨハン2世から「具合が悪

くなり、弟の一人に演奏会シーズンの終わりまで代わりを務めてほしい」と手紙が来て、母アンナは「ヨーゼフに行かせる」という返答。しかし、彼は8月27日にウィーンの聖シュテファン大聖堂で結婚式を挙げます。ヨーゼフは騙されたと感じていたといえます。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈さあ、逃げろ！〉 op.73

Eduard Strauss: *Auf und davon, Polka schnell*, op.73

1871年3月5日に楽友協会でエドゥアルトは「謝肉祭のレビュー」を開催。2月10日に初演されたヨハン2世による《インディゴと40人の盗賊》から序曲、カドリーユ、バレエ音楽を演奏し、最後の曲は同曲でした。題名はゲーテの《ファウスト》から取られ、メフィストフェレスが「私は外で張番をしています。魔法の馬を支度しておきます。それに乗ってお逃げなさい」と言い、ファウストが「さあ、逃げろ！」と答えるのです。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ〈上機嫌〉 op.281

Josef Strauss: *Heiterer Muth, Polka française*, op.281

1870年2月9日にヴィーデン地区の救貧舞踏会のために造園協会の「花のホール」で初演。人生をさらに上に向かって上機嫌で生きていこうとする姿勢が共感を浴びました。しかし、ヨーゼフは同曲の初演日をノートに書くのを忘れていました。ですから、彼の初演記録簿には13月13日に楽友協会の黄金ホールで開かれた彼の最後の「謝肉祭のレビュー」が初演とされています。歌詞はウィーン少年合唱団の指揮者ヴィルトによります。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈いつまでも永遠に〉 op.193

Josef Strauss: *For ever, Polka schnell*, op.193

1866年1月29日にゾフィーエンザールでの慈善演奏会で初演。なぜ英語が使われたのか。それは1867年夏にヨハン2世とパリ万博に赴く可能性でした。実際にはヨハン2世が一人でパリに行き、第2人とシュトラウス楽団はウィーンに留守を任されました。パリ万博ではヨハン2世の〈美しく青きドナウ〉 op.314 が大喝采を受け、イギリスにも行きました。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈まひわ〉 op.114

Josef Strauss: *Zeisserln, Walzer*, op.114

19世紀のウィーンを御存知の方なら、ノイバウにあった「大きなマヒワ亭」を思い起こすでしょう。しかし、同館はこれには関係がなく、ヘルナルスのウンガー・カジノで1861年8月26日に開催されたヘルナルス教会祭で初演。「まひわ」はダンス・ホールに来た人びとを呼んだ名前。同曲はヨハン1世のレントラー風ワルツの発展形であり、人気作。

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー2世：バレエ《エクセルシオール》から〈グロッケン・ポルカとギャロップ〉

Joseph Hellmesberger junior: *Glocken-Polka mit Galopp aus dem Ballett Excelsior*

バレエ《エクセルシオール》はマレンコが振付家マンゾッティと組んで1881年1月11日にミラノのスカラ座で初演。このバレエはウィーンでも1885年5月7日に宮廷歌劇場で初上演。振付師はメンデス。物語は19世紀の科学の進歩を讃え、光、暗黒時代、文明という寓意的な登場人物でも特異な作品でした。ヘルメスベルガーはウィーン上演用に同曲を

作曲。6場のワシントンの「テレグラーフ宮殿」前でテレグラーフたちが踊る場面。

ヨーゼフ・シュトラウス：オーケストラ・ファンタジー〈アレグロ・ファンタスティーク〉

Anh.26b Josef Strauss: *Allegro fantastique, Orchesterfantasie, Anh.26b*

ウィーンでの作品番号のない曲は忘れ去られていました。これをロシアで発見したのはアイクナー博士です。1862年8月16日(西暦28日)に同曲は初演。レオノフの写譜には「弓奏楽器のための高度な技巧を要する作品」と記されています。ヨーゼフが妻に「毎日、評価は高くなり、すごい喝采を受けます。慈善のせいで、楽団も心痛が増えています」と書いています。重々しい雰囲気風の作風は、ヨーゼフのヴァーグナーを好んだものです。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ〈水彩画〉 op.258

Josef Strauss: *Aquarellen, Walzer, op.258*

1869年2月1日にディアナザールで芸術家協会「ヘスペルス」の舞踏会が開かれ、同曲が初演され、その翌日に同じ会場でウィーン男声合唱協会がヨハン2世の〈酒女歌〉 op.333が初演。この2曲の傑作は芸術的競争の頂点です。審判を下したのは聴衆で、勝者は兄ヨハン2世。聴衆とは音楽愛好家をも飲み込んでしまい、彼らが天才的な才能を際立たせるヨーゼフを褒めたたえようともヨハン2世を王者としたのです。しかし、ヨーゼフの凄さがわかるのが同曲です。「音が紡ぎ出す芸術家らしい夢見心地」を同曲にみていました。2002年のニューイヤール・コンサートで小澤征爾が指揮しました。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈山賊のギャロップ〉 op.378

Johann Strauss (Sohn): *Banditen-Galopp, Polka schnell, op.378*

1877年1月3日にオペレッタ《メトウザレム王子》をカール劇場で初演。しかし、批評家たちはこれを酷評しました。同曲は第3幕の二重唱と合唱(No.17)「静寂のなか、ひそかにわれわれは宝物をいただく」と第1幕のフィナーレ(No.7)のモチーフから作られています。シュトラウス夫妻は《メトウザレム王子》の初演後にパリでの契約を履行するためウィーンを立ち去りました。パリでは3月8日にオペラ座舞踏会で〈ケクシルバー・ギャロップ〉という名で上演。帰途、バーデン・バーデンに立ち寄り、3月18日にコンフェルザツィオンスハウスにおいて〈サプリスティ〉という別名で披露。これが同曲です。